
根暗ちゃんと墮落くん

星野海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

根暗ちゃんと墮落くん

【Nコード】

N0171Z

【作者名】

星野海

【あらすじ】

少し道を外れたら、彼女と出会った

墮落の一途を辿ってきた僕は、ある日、一人の女子と邂逅することとなる。

果たして、僕と彼女は如何なる道を進むのか。

……多分、墮落三昧になるんだろうけど。

プロローグ（前書き）

本作者は西尾維新先生、森見登美彦先生、人間人間先生が大好きです。故に、文体や表現等に似通った点が見られるかもしれませんが、そこはどうか、大目に暖かい視線で見てください。

見てくださった方々には感謝の限りです。

目に留めてくださった方々にも感謝の限りです。

到らぬ点が乱れ打ちだとは思いますが、寛容な皆様の心で、どうか許容してください。

プロローグ

今までの人生、年齢で言えば十七年と数ヶ月、僕は際限なく墮落の一途を辿ってきた。数多く眼前に広がる木の根のような未来を見据え、その内一つは必ずある最悪の一手というものを、ある種選りすぐんで選り抜いて、ただひたすら自墮落な環境に身を置いてきた。おかげ様で、今、僕は当然の如く最悪の名に相応しい立場にいる。

友達は一人もいないし、一度も出来たことがない。勉学に励む暇は全て無駄な時間へと姿を変え、人の厚意も反故にした。

助けを求められれば追い討ちをかけ、善意には悪意を返し、崇高な芸術作品を落書きに変え、人の努力を水泡に帰し、援護には無気力で応え、傷口を抉り塩を塗り付け、悲哀の涙を鼻で笑い、会話の輪をことごとく破滅させてきた。

人間関係の破綻、満身創痍の悪化、事態の改悪、状況の死滅、希望の排除、絶望の勧誘、裏切りの推薦、環境の衰退、虐めの優先、救助の妨害、規律の廃止、苦手意識の増加、助言の忌憚、可能性の放棄、邪魔の応援、個人の無視、過去の遺棄、詰問の強化、拷問の改良、意見の排他、公序の欠落、風紀紊乱の崇拜、諧謔の廃止、個性の希薄化、無駄の優遇、無関係の強制、非難の集中、大過の増殖、失敗の踏襲、駄作の公開、苦痛の延長、損得の曖昧、現実の否定………という感じに、かつての僕の所業の数々を上げれば切りがない。

上げれば上げる程、僕の生きた軌跡、もとい遍く生き恥をまざまざと証明する証左となるのだが、しかし、僕は一切恥じるつもりはない。断じて宣誓しよう、僕は恥じるつもりはない。

僕が選んだ生き方である、何を恥じる必要があるものか。今時、蛆虫の如く世に蠢いている、目前の選択肢に左右され、結果が見え透いている中で無難な道を選び、我が道を進んだ僕のような勇猛果敢な人物を、普遍を抑えてしたり顔して、自らより下だと馬鹿にす

る。そんな阿呆になるくらいならば、僕は、ならずして勇ましく不埒の獣道を歩むだろう。

定められたレールの上を、ただ速いか遅いか、優秀が愚劣で争う。そんな詰まらぬ人間になるのであれば、僕はいつそ、この命を擲ち、自由気儘の付和雷同とした生き方を指し示す。

歓迎されぬ、感動されぬ。

そんなことは分かり切っている。

当たり前の道を当たり前のように進む。

故に、僕は高らかに道歌しよう。

不満を極める下らなさを。

平凡を逸脱する高尚さを。

拍手を求める。大地を割らんばかりの拍手喝采を。

……さて、こんなところで話を切り上げようと思うのだが、果たしてどうだろう。

見るに耐えない、聞くに耐えない僕の戯言を見させられ、聞かせられるのは些か不満があるのではなからうか。

しかし、拒否しようとするなら、やめておくのが勝ちだ。先述の通り、僕は大変ねじ曲がった性根を所持しており、更に現段階に於いても目下発展途上なのだ。下手に刺激をすると、何かと疼いてしまう。

適当に聞き流しながら、有耶無耶に受け流すことをお勧めする。

まあ、取り敢えず、勇猛果敢なんだが馬耳東風なんだが判断しかねるが、ひとまず語らせてもらおう。

僕と彼女の物語を。

根暗と墮落の話。

僕は断固、自らの意志を貫く所存である。

しかし何分、見るに耐えない。

彼女と僕の曖昧関係

通例の如く今日を過ごしていたならば、きっとしないようなこと……を脳裏に浮かべながら、校内を徘徊する怪しい人影が一つ。人目を気にするような風情は微塵も感じられぬその怏々たる出で立ちに、学年の上下を無関係に生徒が道を空け、近くの教室に身を隠す。そんな不安定な状況を満足気に思いながら、しかし表向きには一切表さず、その怪しい限りの人影は歩き続けていた。

既に見える範囲に人はおらず、まるで休日の無人の校舎に侵入したかのような錯覚をひしひしと感じるが、その実、単に現在が放課後であり大半の生徒や教師が部活や下校に励んでいるだけに過ぎない。

S H L が終わってからそれ程時間が経過していないが、それでも今日に至って人が少ないのは、先程から不審人物が徘徊しているからである。制服を着て鬱屈とした雰囲気を垂れ流し、不幸をばらまく勢いで校内を練り歩くその様は、まさしく不審人物。不審人物を絵に描いたような男だった。通報されても文句を言えないような、そんな男だった。

その怪しいと怪しいを掛け合わせた不審人物こそ、僕である。

先程先述した通り、通例ならばしないことと思案した結果、不審人物さながらの雰囲気で徘徊するという所業が頭に浮かび、それを実行している最中なのだ。更に、現段階に於いて誠意模索中である。そんなこと止めて早く下校すればいいものを、とほざく愚者がいるかもしれないが、しかしそんなものど吹く風だ。人の意見に左右される僕ではない。そんな柔い人間ならば、とつくの昔に朽ち果てていただろう。

しかしながら、この行動にも飽きた。

次の天性の閃きを待つことにした。しかし、待ちながらも足は忙しなく動かす。

天からの閃きは今か今かと待ち構えていると、いつの間にか校舎を通り抜け、全校舎を横断する長い渡り廊下に出た。その広がるような視界のどこにも、生徒や教師は見当たらない。ここまで無人なもの不思議なのだが、良く考えてみれば無人の方が僕の好みである。好ましい状況は、掃いて捨てる程あっても困らない。困るとして、置き場くらいだろう。さて、本格的に退屈してきた。墮落に身を落とすのは各かではないが、しかし時間を浪費するのは頂けない。数限りある人生の時間だ、無駄にするのは勿体無いだろう。

いや、徒労に終わるといふ墮落道も無きにしも非ず。それもまた、良いかもしれない。

結局何もせずふらふらに歩いてみると、目の前に重厚な扉が一つ。更なる墮落へと繋がる地獄への扉かと思つたが、表には《図書室》の文字が分かり易く書かれていた。

ここで時間を潰すのもありだな。そう思い、取っ手に手を掛けようとして、取っ手に引つ掛けられた「本日休館」の札が目に入る。しかし、それが視界に入るのも構わず、取っ手を捻った。

簡単に、扉は開く。

図書委員会の方々は職務怠慢で解散するべきではないか、これで書籍を盗まれたらどうするのか、と思いつながらも、静か且つ堂々と図書室に足を踏み入れる。

取り敢えず、図書室に拠点を置く教師に見つかったら怒声が響くだろう。しかし、それは退室する理由にはならない。生憎、僕はお世辞にも読書は好きではない。精々、空いた時間の暇潰しくらいである。とは言え、嫌いでもない。

今朝方道端で擦れ違つた赤の他人……それが僕と読書の関係だ。しかし

静けさと図書室特有の香りに満たされた中、電気も点いていない無人の図書室を見渡し、首を傾げた。何故誰もいないのだろうか、何故鍵が空いたままで無人になっているのか、何故いつも一人はいる教師が一人もいないのか、と。

まあ、単純に鍵を閉め忘れただけとか、偶然退室しているだけとか、もしくは僕の前に誰かが盗みに入ったとか、そんな詰まらない理由なのだろう。拍子抜けだなあ、と溜め息をついて、ふと奥から微かに明かりが見ることに気付く。やはり誰かいたのか、と、ひとまず抜き足差し足忍び足で近付いていく。

図書室のあまりの静寂に、靴下が床を擦る音やズボンの擦る音、関節が軋む音等ですら騒がしく聞こえる。限りなく無駄な緊張に包まれながら、明かりの場所へ歩みを向ける。

本棚の影から覗き込むよう、その場所を窺う。

小さなスタンドライトが、机の上で光を灯しているだけだった。

「……………」
何とも形容し難き虚無感が体を満たし、一気にやる気や元気その他諸々の気が空気中に発散される。ついでに大きめの溜め息を一つ、幸せを一つ自ら吐き出した。

これこそ時間の無駄だ、と現状に見切りを付け、その場から立ち去ろうとして、机の上に置いてある一冊の書籍が目に入った。頼りない明かりに照らされ、机の上に一冊だけぽつねんと置いてあるその書籍は、得も言われぬ求心力を放っていた。いつそ妖気と言って差し支えないと思うが、しかしそんなあからさまに垂れ流れるものか、と打ち消した。

歩み寄り、その書籍を手取る。それは、俗に言うライトノベルというもので、デフォルメされ過ぎな絵柄が表紙を飾っていた。

僕は何かと物事に対して否定の言葉を多く口にするが、しかし、真っ正面から否定したことはない。それは、千差万別な個性を否定しない為だが、表向きはそうでも裏では、自らが否定されないためという、微弱で脆弱な精神の賜である。メンタルは人並みにはあると自負しているが、擦れ違う他人の些細な一言で悩む器の小ささを、僕は持ち合わせている訳で、故の「他人に否定されない為の作意」だ。

しかし、今僕は少しだけ思ってしまった。

駄目だとは思わないが、しかしどうだろう　こんな書籍を読んだ暁には、僕は更に墮落の一途を辿れるのではないのだろうか、と否定するのではなく、しかし肯定もしない。静かに受け取る。恐る恐る、書籍の表紙に手を掛け、表紙を捲ろう　として、暗闇の中から物音がすることに思い至った。即座に、その音のする方を見入る。それは暗闇の奥、数列向こうの本棚の間からだった。ギシギシと、床の軋む音が近寄ってくる。暗闇の中から響くその音色は、地獄から鳴り響く楽音に感じられ、意図せず意識が集中し、動きが止まる。

ただでさえ暗いのに、僅かな明かりが暗闇の深遠さに拍車を掛ける。ついでに、僕の恐怖心にも拍車を掛ける。いらぬ世話だ、と毒突くが、それは虚しくギシギシ音に消される。

音が近付き、今正に本棚の影から音を立てる張本人が現れる、刹那。

思わず、微弱な明かりもといスタンドライトを手に取り、暗闇を照らした。暗澹たる気分を払拭する為、暗闇を見通す為、張本人の目眩ましの為に、明かりを向けた。

すると、本棚の影から小さく悲鳴が上がった。はてなと思ひ、スタンドライトを元の位置に戻す。明かりは抑えられ、再び不明瞭な視界になる。それを確認したのか、音を立てた張本人はゆっくり訝しいという足取りで、近寄ってきた。足音で分かった。

明かりに少しずつ、その人物の足元が照らされていく。足元、膝、太腿の順で、ゆっくり焦らすように、その姿が白日のもとに晒されていく。それはすらりと細い、黒いタイトの頼りない足だった。

そして、暗がりから現れたのは、一人の女子生徒だった。

目元を覆うまで伸びた前髪は、いつか見たホラー映画の魑魅魍魎と見間違えるようで、思わずたじろいでしまう。それだけ卓越した存在感を、その生徒は悠々と所持していた。その威力は赤子なら一目見ただけで阿鼻叫喚し、今際のきわに立つ人を容赦なく死へと追

いやり、勇猛果敢な成人男性ですら腰を抜かす程である。それは致し方ないだろう。僕がたじろいだけで済んだのは僥倖といふべきだった。

とは言え、その女子生徒に対して恐怖に近い感情を抱いてしまったことに変わりない。

暗がりでも相対しているから、時間の経過も感じる恐怖も数倍に感じられる。僕も女子生徒も、何のアクションも起こさない為、必然的に無言の空間が広がる。のしかかるような、押し潰されるような静寂は図書室であれば当然なのだが、この場合大いに超越していた。過ぎていた。もう少し控え目だっていいだろう。飢えた野良犬の方が慎ましい。

すると、女子生徒は唐突に少しだけ顔を上げ、しかし右目以外は全て前髪で隠れたままである為非常に暗い印象のまま、小さな声で囁いた。

「すみません」

不可思議な存在を見るような、そんな視線だった。

女子生徒は言った。「どちら様ですか？」

「知りません」

僕は言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0171z/>

根暗ちゃんと墮落くん

2011年12月3日01時46分発行